



こんにちは、ヘルパーステーション カルムです。

前回の「認知症について②」の続きになります。

- ❖ 普段との違いを察知できる感覚「気づき」が大切。
- ❖ 認知症を患うと記憶力低下の他に自身を取り巻く環境に対応する力も失っていき、社会性が乏しくなる場合も少なくない。
- ❖ 「本人を取り巻く多面的な状況」は「多角的な分析・評価」を行うことで支援すべき内容が見えてくる。

ということが前回の要点でした。

今回のキーワードは「**本人に根付いている想い**」です。

過去、医療・介護の現場では認知症をはじめとした様々な精神疾患のある患者に対し、食事や入浴、排泄といったケアを患者の意思に関係なく、まるで工場の流れ作業のように人権を無視して行われていた時代がありました。

認知症になると何もわからなくなる、何も考えず生きている。はたして本当でしょうか？

仮に何もわからなくなってしまうとしたとして、自分もしくは大切な人がされる立場になった時を想像してみてどう感じるでしょうか。

認知症を患った方の多くは、頭の中から記憶を出し入れすることが困難になりますが感情は残っています。そして記憶に関しては、新しい出来事を留めておくことは難しくなりますが過去に繰り返し経験してきたことは奥深く残っています。

感情の起伏はもとの性格や過去の出来事が関係していたり、繰り返してきた経験からは価値観などが形成されたりしますが、生い立ち、職業、どのような生活を送ってきたかなど、現在に至るまでの生活歴を知ることは、本人に根付いている想いを知る上で大切な情報になります。

それでは本人に根付く想いとは具体的に何が挙げられるのでしょうか？

1. 自分らしさ

自分自身がほかの誰でもない唯一の存在であるということ。そして過去からつながって今の自分があるということ認識すること。認知症になると、記憶の面で過去と現在との接点が寸断されてしまうことが多く、最もナイーブな心理的要素と言えます。

2. 結びつき

人との結びつきはもちろん、特定の物や行為への愛着も含まれます。記憶障害や見当識障害が進むほど、昔からよく知る人や物と繋がって安心を得ようとするのは、ごく自然な流れです。

3. 携わること

若いころに得たスキルを生かし、家族や地域社会に対して小さなことでも手伝いできれば、感謝される喜びや自分が必要とされている実感がわいてきます。

4. 共にあること

認知症を患った方も、自分が集団の中の一員であることに安心感を覚えます。逆に人の輪から外されたことで疎外感を覚え、不安や孤独からますます認知症が進行することもあり得ます。

5. くつろぎ

寝たきり生活になった方においては、長時間同じ体位でいないか、おむつ交換がされていないかなど、苦痛や不快な状況を強いられていないこと。またそれだけでなく、家族、介護士、訪問客などとのふれあいによって心が安心してリラックスできているかも重要な要素です。

これら5項目は認知症を患った方を一人の人間として尊重し、その人の立場に立って行う認知症ケアの理念になっていて**パーソンセンタードケア**と呼ばれています。

上記のうち一つでも満たされると、連鎖するように他のニーズも満たされるようになり、心理的に落ち着いた状態を取り戻すことができると考えられていて、決して学術的なレベルの話でなく日ごろから認知症高齢者のことを気にかけて輪の中に入れることで、自然とQOL（生活の質）も改善されていくという考え方です。

今回はここまでとなります。次回キーワード：「QOL」